

「皇帝への税金」

2015年11月26日

ルカによる福音書 20章 20節～26節。そこで、機会をねらっていた彼らは、正しい人を装う回し者を遣わし、イエスの言葉じりをとらえ、総督の支配と権力にイエスを渡そうとした。回し者らはイエスに尋ねた。「先生、わたしたちは、あなたがおっしゃることも、教えてくださることも正しく、また、えこひいきなしに、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。ところで、わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」イエスは彼らのたくらみを見抜いて言われた。「デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、だれの肖像と銘があるか。」彼らが「皇帝のものです」と言うと、イエスは言われた。「それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは民衆の前でイエスの言葉じりをとらえることができず、その答えに驚いて黙ってしまった。

エルサレム神殿当局は主イエスを殺害する機会を狙っていた。そこで、正しさを装う回し者らを遣わし、主イエスの言葉じりを捉え、ローマの総督に渡そうとした。回し者らは丁重に挨拶した。「先生、わたしたちは、あなたがおっしゃることも、教えてくださることも正しく、また、えこひいきなしに、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。」深い敬意を表した挨拶は自分たちが用意した問いによって、主イエスをやり込めることができるという自信を示している。その問いとは「ところで、わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」というものであった。ローマへの納税が課せられていた。これは、律法に適っているかどうか。適っていると答えれば、ローマに媚び、恐れる者として、愛国主義的なファリサイ派からの攻撃材料となる。適っていないと答えれば、ローマへの反逆者として、ローマ支配を容認するヘロデ派からの攻撃材料となる。「イエス」とも「ノー」とも答えられない「両刃の剣」であった。それが、彼らの自信満々の問いかけであった。主イエスは、回し者らの下心を見抜いていた。「デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、だれの肖像と銘があるか」と逆に問いかけた。彼らが「皇帝のものです」と答えると、主イエスは「それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言われた。

「皇帝のものは皇帝に」とはローマへの納税を認めるという言葉であろう。「神のものは神に」の「神のもの」に関し、三つの解釈がある。①「信仰」と理解する。この世の社会規範は守るが、信仰は神のものであり、それは神のみに返す。政治と宗教を分離しなさいということになる。政教分離の近代法を知る者には理解し易い解釈である。②「エルサレム神殿への献金」と理解する。ファリサイ派は神殿への献金を強要した。ヘロデ派はローマへの納税を強要した。それぞれの立場で、義務を強要しているお前たちは、このような問いを持って来ることはできないだろうと、問いそのものを無価値とする返答と理解される。③「イスラエルの大地」と理解する。ローマへの納税を認めるが、大地は神のものである。その大地は神に返しなさい。主イエスはローマ支配を受け入れていたが、侵すことのできない大地への信仰があり、その信仰を貫きなさいという理解になる。私は②の理解を受け入れている。納税義務を強要し合っているお前たちが問える問いではないと、問い、そのものを無意味として葬り去ったのではないか。彼らは主イエスの巧みな答えに驚き、言葉じりを捉えることができず、黙ってしまった。